

特定非営利活動法人 どリーむ・わーくす（余市町）

○基礎情報【経営形態：調理用トマト、カボチャ、ブドウの栽培】

【従業員数：3名、障害者数：年間延べ約100名（施設外就労）】



<問い合わせ先>理事長：水尻氏 ☎ 0135-48-5485

1 農福連携に取り組んだ経緯

理事長の水尻宏明氏（56歳）は、自閉症を持つ長男（25歳）が自立した生活を営めるよう、農業を中心とした障害者の仕事作りを構想していた。民間企業に勤務後、2010年に4代目のブドウ農家として余市町の実家に就農した。2014年、調理用トマトの実験栽培を契機として、念願の障害者受入れを開始。2016年にはカゴメ株式会社との契約栽培を開始。さらに特定非営利活動法人化し、2017年9月にはB型事業所を設立した。

2 取 組 内 容

- (1) 就労形態：施設外就労として、余市町内及び札幌市の福祉施設から、知的障害の方を中心に年間延べ約100名を受入れ。
その他、町内・外の福祉施設などから、親子での農作業体験の受入れも行っている。
- (2) 就労時期：6月（トマト定植）、8～10月（トマト収穫）、11月（カボチャの種取り）などがある。
- (3) 就労時間：施設外就労の場合は福祉施設と相談。1日2時間～5時間程度
- (4) 工 賃：例）トマト1kgの収穫につき12円。

3 トマト栽培の特徴

- (1) 農業改良普及センターから、調理用トマトの試験栽培地の相談を受けた際、調理用トマトは果肉が硬くて収穫時に潰れにくく障害者の作業に適した作物と判断し、2014年から本格栽培を開始した。
- (2) 栽培品種の「爽果」（サヤカ）は、カゴメのオリジナル品種で全国では余市町でのみ栽培されている。
- (3) 「なつのしゅん」という品種も栽培し、札幌市や余市町のイタリアンレストラン等でパスタのトマトソースとして使用されている。冬季冷凍販売分として、約400kgを町内の冷凍業者に依頼している。
- (4) 障害者に配慮し、濡れたトマトを掴んで手が不快にならないよう、薄手のゴム手袋を用いている。また、トマト収穫時に腰を曲げて足腰に負担がかかる姿勢を取ると、作業が長続きしないので、膝を地面に付けても楽な姿勢を取れるよう、100円ショップでも購入できるガーデニング用の膝当てを利用している。

4 カボチャ栽培の特徴

- (1) 遊休農地を借り受けて肥沃にする間、痩せた土地でも手間をかけずに育ちやすいカボチャを栽培。栽培品種の「万次郎」は、1苗あたり約80個の収量が見込める。
- (2) 万次郎の糖度は約20度と高いため、スイーツ向けにペースト化し、知人のパティシエに依頼してモンブランやタルトの試作品を作った。将来的には、障害者がカボチャ生産・加工に携わることを目指している。
- (3) 食用種子カボチャ品種「ストライプペポ」も栽培しており、2018年からの本格販売を目指している。

5 農福連携への考え方

- (1) 農地賃貸料だけでは高齢農家がリタイアした際には経済的に苦しいため、自ら農場主を続けて生産活動を通じた収益を上げる必要があることから、障害者雇用がその手段となりうる。
- (2) 障害者の活躍という農福連携の趣旨からすれば、障害者の作業自体が付加価値を生むことが必要である。
- (3) 農福連携の推進には、コーディネーターの育成とマッチング活動への対価の支払いが重要である。コーディネーターを担う人は、農福連携に興味がある方であれば、地域おこし協力隊などの個人でも構わない。

6 今後の課題や将来展望

- (1) 現時点で障害者は、繊細な作業が必要なブドウの収穫や選果には携わっていないが、今後は「指の切れないハサミ」を活用して利用者が房の間引き作業等のブドウ栽培にも携われるようにし、人手不足に悩む周囲の農家への派遣も検討している。2017年9月、B型事業所を新設し、現在、利用者を募集している。
- (2) 平成29年度農山漁村振興交付金を活用し、障害者が農産加工（乾燥ブドウや余市町産フルーツを用いたドリンクビネガー）の製造・販売などに携わることを実験している。
- (3) 障害者雇用の拠点となる一般社団法人等を設立し、余市町でも障害者雇用を進めたい。